

PipeLine

特集

分科会

「大学基礎論」
「課題探求実践セミナー」
「学問基礎論」

大学基礎論

課題探求実践セミナー

学問基礎論

No.48 Contents

特集	分科会「大学基礎論分科会」	P1
	「課題探求実践セミナー分科会」	P3
	「学問基礎論分科会」	P5
教養のページ	大学における18歳選挙権と「政治活動」	P7
FD部会より	あと3ヶ月で変わりたいあなたへ 「出来たことノート」を書いてみよう!	P9
共通教育実施委員会からのお知らせ	ちゃんととっていますか? 地域関連科目	P11

大学基礎論分科会

大学基礎論分科会長

藤原 滋樹 (理学部)

大学基礎論分科会委員

松本 健司 (理学部)



『大学基礎論』の目標は以下の4つです。

1. 「教わる」から「学びとる」へ。大学で学ぶ意義と目的を理解し、学ぶ姿勢を身につける。
2. 卒業までにどんな能力を身につけたいか。卒業後どんな自分になりたいか。自分の将来像を意識する。
3. 大学の学問が社会とどう関わっているかを考える。高知における高知大学の存在意義を考える。
4. グループワークを通じて、相手の考えを理解し自分の考えを伝えるコミュニケーションの能力を磨く。

「大学での学び」の目的や「社会との関わり」のあり方は学部によって違います。そのため、授業内容は学部ごとに工夫しています。ここでは、理学部で行っている授業を紹介します。

理学部では、第2週にアドバイザー教員が学生と面談し、直接対話によって「大学で学ぶ」ための意識づけをします。第3週から第11週の奇数週には、学部教員や学外講師による講義を行います。学部教員(学部長や学科長など)は、理学部での学び(主として目標の1と2)について話します。学外講師は県内の企業や学校などで活躍されている理学部卒業の先輩です。地域や企業、教育界が大学の卒業生に期待すること(主として目標の2と3)について熱いメッセージをいただいています。それぞれの講義の翌週には7クラスに分かれてグループワーク形式の振り返り演習を行います。松本クラスの演習では、講義内容について「共感できたこと／できなかったこと」をグループで議論し、「4年間をどう過ごすべきか?」という主題で意見をまとめます。最後の3週は、グループごとにプレゼン資料を作成し、演習の成果について発表会を行います。

理学部の1年生は学科やコースに所属していないので、演習クラスは学籍番号で決まります。そのため、様々なコースに進みたい学生たちが同じクラス、同じグループで議論します。はじめは知らない者どうして話が進みませんが、「授業の振り返り」という共通の話題を介して徐々に発言が増え、回を重ねるごとに意見交換が活発になってきます。プレゼン資料や発表にはグループごとの特色があります。発表者以外の学生が行う採点でも、評価のポイントに学生の個性があらわれます。こうした学生の活動を見ていると、多様な考えをもつ学生どうしが議論することでコミュニケーション能力が身につけていることを感じます。

平成27年度の授業アンケートでは、授業を通じて「大学で学ぶ意義」や「どんな能力を身につけたいか」を意識したという学生が8割を超えています。学外講師の講義を評価するコメントが多いのが印象的です。また、「相手の話を聞き、自分の考えをわかりやすく伝えることの重要性」を認識したと8割の学生が答えました。一方で、授業を通じて「自分の将来像」を意識したという学生は5割程度でした。理学部学生の多くは「理科が好き」という程度の動機で入学するので、1年生が明確な将来像を描けなくてもしかたありません。「高知における高知大学の存在意義」について意識した学生も少ないですが、数学や物理学の「高知における意義」は、教員でも上手に説明できません(理学部のシラバスには「高知における」とは書いていません)。この授業でそれらの課題に気づき、その後の大学生活で答えを出せたら、初年次科目としての『大学基礎論』の目標は達成できたと言えるでしょう。



以上、理学部の『大学基礎論』を紹介しましたが、医学部では医学科と看護学科の合同授業を行ったり、地域協働学部では合宿を行って教員と学生との人間関係構築を目指したりと、学部ごとに特色のある取組みがたくさんあります。一人一人の学生が高いモチベーションを維持し、すぐれた能力を身につけて大学を卒業し、そして社会に出て活躍する…。有意義な大学生活へのスタートダッシュのために、学生も教員もこの授業に真剣に取り組む価値はあると思います。

課題探求実践セミナー 分科会

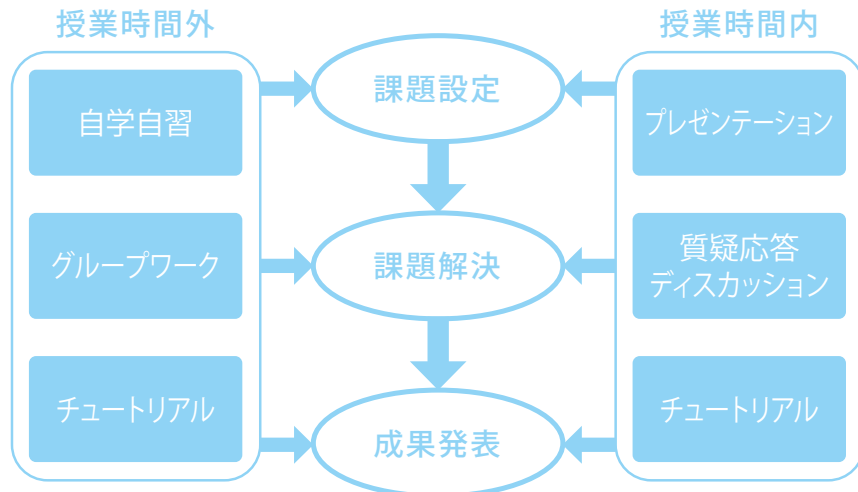
課題探求実践セミナー分科会長

俣野 秀典 (地域協働学部／大学教育創造センター)

「課題探求実践セミナー」は能動的・主体的・探求的な学びへの転換を支援する授業です。初年次科目のなかでも学生の自律的な学習に重点がおかれ、グループワークを学習方法の基本に据えて、学生自身が自己分析や振り返りを行うことで学びや成長への見通しを持っていくところに特徴があります。2016年度は、共通教育開設の「自由探求学習Ⅰ・Ⅱ」「地域協働入門Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」「学びを創る」「学びを考える」「国際協力入門」と、各学部開講の授業で構成されています。

この「課題探求実践セミナー」の開設は2008年の共通教育改革にさかのぼります。初年次教育の充実・強化がカリキュラム改革の柱となり、初年次科目で自律的人材の基盤を育成する流れができました。その中心に位置していたのが「課題探求実践セミナー」でした。「自律創造学習」(2004-2007年度)や「自律協働入門」(2006-2014年度)など大学教育のあり方を探るこれまでの実験的な取り組みの経験を活かして複数の科目群として新設されました。

「課題探求・解決」「他者との関係性」「自己決定」を自律型人材の育成のためのキーワードに、学習者の能動性(学ぶ意欲)を引き出し、コミュニケーション能力や協働性、粘り強く考える力を育成することに有効とされていたPBL(Problem-based learning)をベースに課題探求実践セミナーは創られています。学習・授業のなかで可能な限り他者との多様な関係を創出する工夫がされており(他者との関係性)、学生が自分で決めて自分の責任で進めて行くような自己決定の機会を増やす(自己決定)という要素が組み込まれているところが従来のPBLとの違いです。具体的には、グループ間交流(プレゼンテーションやディスカッション/ダイアログ)が多く取り入れられ、課題設定・解決のために授業以外の他者(学内の他の学生や教職員、地域住民など)との接触が促され、課題も学生が自由に設定できるように設計されています。



課題探求実践セミナーの進み方(基本型)

標準的には、1講義あたりの学生数を60名までとして、1グループの人数は4-6名で、複数教員(1講義あたり3名程度)によるチームティーチング方式で担当し、授業に関して検討・改善を随時行っています。「学びの転換」を意図した授業であることから、高大連携科目として高校生を受け入れている科目もあります(2016年度は「学びを創る」「学びを考える」「国際協力入門」)。

特徴的な授業であることから教員の教育力向上(Faculty Development, FD)の実践的な場としてもオープンにされており、現場体験(On-the-Job Training, OJT)の形で担当外の教員も受け入れています。学生の自主性や意欲を引き出しながら授業を進めるファシリテーション力についても、大学教育創造センター主催で毎年プログラムが開講されており、担当者の受講が推奨されています。2009年度からは四国地区大学教職員能力開発ネットワーク(SPOD)事業により教職員の研修機会が大幅に増えました。学生による「自己分析アンケート(2012年度まで)」「Self-Assessment Sheet」「授業評価アンケート」も全授業で実施・分析しており、共通教育活動報告書に毎年掲載しています。

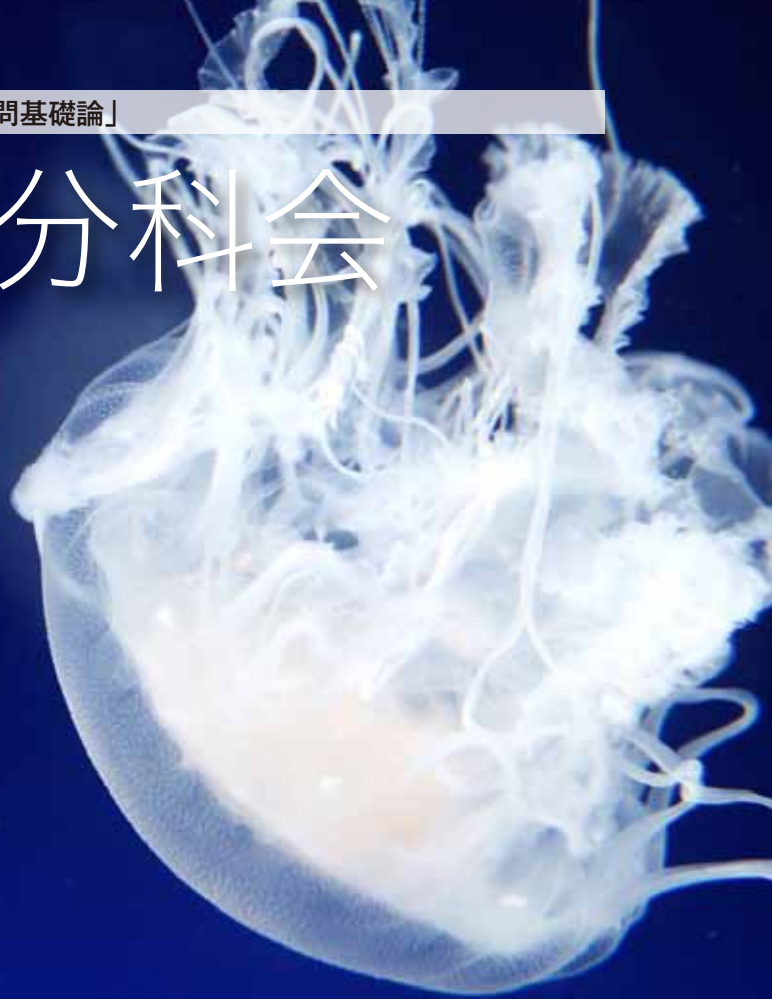
最後に、私が担当している課題探求実践セミナーの2016年度の学生のコメントをいくつか掲載しておきます。

- ・ 自主的な活動の機会が多くあった。
- ・ 自分たちだけで計画することが多かった。
- ・ 今までの講義の中で一番楽しかった。
- ・ 生徒と学生の違いについて常に求められた。
- ・ 苦勞もあったが制約のある中でこそ感じた学びは他では得られない貴重なものだった。
- ・ 「勉強する」と「学ぶ」ことの違いがわかった。学びの本質を自分の中で探せた。
- ・ 常にグループで協力し合うことが必要な活動が多かった。
- ・ 活動の時間が多く、聞くだけではわからないようなことも理解できたと思う。
- ・ なぜそうなるのかを問いかけ続けていこうと思う。
- ・ この授業は自分で進む方向や方法を探す授業だと感じた。
- ・ 卒業研究など答えがないものに活かしていけると思う。
- ・ 自分がこんなにも意見を持っていてまたそれを発信できるのだと気づきました。
- ・ 長らく使っていない脳みそを久しぶりに使った気がした。
- ・ 今までのどんな授業よりも難しかった。
- ・ 嫌でも人と関わる機会があった。
- ・ いろんな考えがあるんだと思いました。
- ・ 己が高まる。
- ・ 全員自ら動く必要があった。

学問基礎論分科会

学問基礎論分科会長

市栄 智明（農林海洋科学部）



●学問基礎論とは？

「学問基礎論」は、1年生第2学期に開講される初年次科目です。各学部の専門教育の導入として、専門分野に必要な知識や素養についてグループワークを通じて学ぶとともに、日本語を含めたプレゼンテーション技法を身につけ、自律的な学びへの土台を築く役割を担っています。学問基礎論の授業形態や授業方法、及び教員の担当方式等は、各学部で決定して実施しています。下記に平成28年度のシラバスに掲載されている各学部の学問基礎論の主な副題（一部は副題以外から）を列举してみます。

人文社会科学部

- 人文科学コースにおける学問的実践の基礎的訓練、スキル習得
- 調査研究の基礎を実践しながら学ぶ
- 結婚を考える
- 面白い経済学書を読む
- 働くことについて考える
- 企業の継続性を考える
- 公務員試験、各種資格試験、法科大学院等の首都圏の大学院進学を目指す人のための法律基礎教育
- ゲーム理論入門
- コンビニという身近なところからビジネスについて考えてみよう
- 法学について学ぶ
- 身近な水産物（エビ）を通じて、先進国と途上国の関わりを考える

教育学部

- 学問の魅力、学ぶ意義を明らかにし、学びの展望を構築する
- 学問の魅力と意義、教師の資質

理学部

- 「理学」全般の理解と再認識と希望コースの専門分野の理解

農林海洋科学部

- 農林環境資源科学科で学ぶことに対する意識や学問的関心を高める
- 農芸化学科の課題探究と研究目標を見出すために！
- 海洋(特に水産)分野の概要や高知県の関わり合いについても理解・関心を深める
- 海洋資源環境学事始
- 海洋生命科学分野の概要や高知県の関わり合いについても理解・関心を深める

地域協働学部

- 専攻する学問について、その魅力やそれぞれの学問が何を課題にしているかを学ぶ

医学部

- 行動科学、行動医学入門
- 看護の学問への入門

土佐さきがけプログラム

- 大学での学問、研究入門
- 英語で紹介する母国
- 生命・環境人材育成コースにおける課題探究と研究目標を見出すために！

上記をざっと見ただけでも、この授業は各学部の裁量が大きく、それぞれで独自にバラエティーに富んだ内容で実施されていることがわかります。それぞれの学部・学科で学べる専門分野や研究テーマについての知識を得て、専門教育でこれから学んでいく際の展望を持つための大切な授業です。様々な経験を積んだ教員や外部講師の話題提供から専門的な知識を得るとともに、今後の学んでいくための課題を見つけ、情報を収集し、他の学生と積極的に意見を交わし、レポートを作成する過程を通じて、高校までの「教わる」が主体の学びの姿勢から、「学びとる」姿勢へ、学びの姿勢の転換を図って行ってください。

●学問基礎論分科会の活動内容

当分科会は、人文社会科学部、教育学部、理学部、農林海洋科学部、地域協働学部、医学部、土佐さきがけプログラムから、それぞれ1名ずつ計7名の委員で構成されています。各学部の方針に基づき、授業担当教員や学生による授業評価アンケートの実施や、本分科会のメンバー間での各学部の活動に関する報告会を開催するなどして、授業改善及びカリキュラム編成に役立てるような活動を行っています。

大学における18歳選挙権と「政治活動」

岡田 健一郎 人文社会科学部准教授

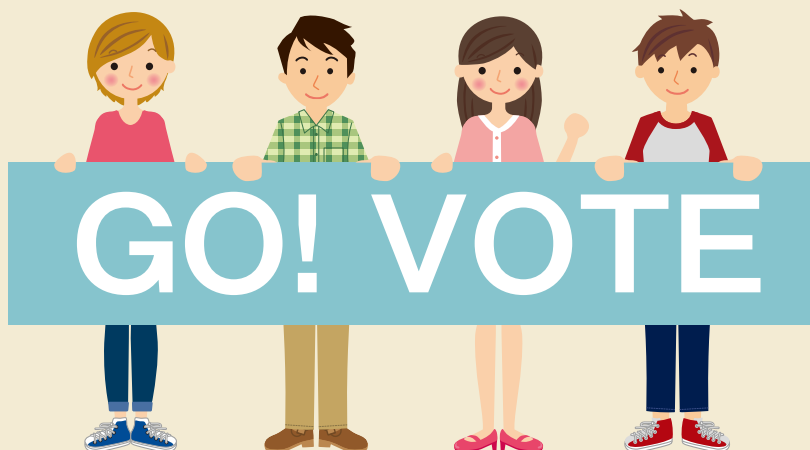
1 18歳選挙権の開始と若者の低投票率

今年の参議院選挙では18歳選挙権の開始が話題となりました。高知大では学生の要望などをきっかけに、2014年から期日前投票所が朝倉キャンパスに設置されていますが、その利用者はあまり多くないと聞いたことがあります(正確なデータは手元にありませんが)。若者、とりわけ大学生の投票率の低さには一般的に以下の理由が考えられます。

- (1) 住民票を移していない学生が多い……その理由は、面倒臭いため、親が地元で各種手続をするため、地元の成人式に出たいため、など様々。
- (2) 投票のやり方がよくわからない。
- (3) どの候補者・政党に投票すればよいかわからない……学生は意外と政治に関心があるようですが、政治の情報を集めるノウハウを十分持っていないように思われます。
- (4) 「選挙に行ってもどうせ政治は変わらない」という無力感・虚無感……もっとも、これは若者に限らず市民全般に強いように思われます。難題です。

2 低投票率への対策

(1)と(2)に関しては今回の参院選で教員有志の取り組みを行いました。具体的には「100%GoVote」(facebook.com/100percentGoVote)という、投票方法などを解説したキャンペーンのチラシを印刷して授業で配布したり、学内の掲示板やグループウェア等で告知を行いました。また、中央大などでは大学自身が投票の呼びかけを行っています。高知大も学内投票所を設置しているのですから、今後はチラシの掲示・配布等をしてよいかもしれません。成人式に関しては、地元に住民票がなくても参加できるようになっています。住民票は、選挙に限らず住民サービスのための大事な仕組みですので、きちんと現住所に移すように大学からも呼びかけることが大事だと思います。





私が担当する「憲法を学ぶ」(共通教育科目)では毎年、「高知県明るい選挙推進協議会」及び「高知県選挙管理委員会」の方において頂き、選挙の意義を説明して頂いた上で、模擬投票を行っています。まだ投票したことのない学生は「投票って難しそう」という理由で敬遠してしまう可能性もあります。模擬投票にはそういった誤解を解く効果が多少なりともあるかもしれません。

むしろ、ヨリ深刻な問題は(3)と(4)のように思われます。いくら投票の仕方がわかって、誰に投票すればよいのか決められなければ意味がないからです。

2016年11月14日、政治学者の田中愛治先生(早稲田大学)による高知大学での講演「無党派層と日本の選挙」を伺う機会がありました。その中で興味深かったのが「政治的有効性感覚(Political Efficacy)」という概念です。これは「自分が政治過程に何らかの影響を持てるという感覚」のことであり、さらに「内的」・「外的」の2種類に分かれます。「内的有効性感覚」は「有権者自身が政治や経済の動きを理解できるといった自分の能力に関する」感覚であり、「外的有効性感覚」は「政治家や政党、国会などが有権者の気持ちに伝えてくれているという」感覚です(久米郁男ほか『補訂版 政治学』有斐閣、2011年、453～454頁)。この感覚が高いと投票率は高くなりやすく、逆に低いと投票率も低くなりやすいとされます。したがって、学生に限らず、有権者の投票率を高めたいのであれば、この両方を高めることがカギになると思われます。

「内的有効性感覚」はいわゆる「主権者教育」などの課題になると思われます。近年、高校ではこれに取り組んでいるようです。大学では政治学、経済学、経営学、法学などの社会科学は比較的ダイレクトにこの感覚を養うことに役立ちそうです。

3 「外的有効性感覚」を高めるためには

問題は「外的有効性感覚」の方です。これは授業だけでは如何ともし難いものがあります。「どうせ投票しても変わらない……」という感覚は、学生だけというより、日本の有権者全般に強いのではないのでしょうか。この改善は容易ではありませんが、要は「自分が政治過程に何らかの影響を与える経験」を獲得することでしょう。「政治」といっても大げさなものである必要はないと思います。例えば地域の防災活動に参加してみたり、最近話題の「子ども食堂」やフードバンクを手伝ってみる。それらのハードルが高いと感じられる場合は、ネットで色々なNGOを検索し、自分が共感できるものに少額でも寄附をしてみるというのもアリかもしれません。

大学生活の中で政治活動に何らかの関わりを持っておくことは主権者教育などの観点から望ましいのではないのでしょうか。またそのことは同時に、「分野を横断した幅広い知識・考え方等が学生自身の内部で統合され、世の中に働きかける汎用的な能力にできる人材の育成」という高知大学の「基本目標」にも適うと思われれます。



あと3ヶ月で変わりたいあなたへ 「出来たことノート」を書いてみよう!

FD 部会長 立川 明

「いろいろチャレンジしているけど、どうも何かを身につけた感じがしない」、「ふりかえりもやっているけどどう変えていけば良いのかわからない」、「何かやりたいけど何からやって良いかわからない」、「就活は4年生になってからだよね〜・・・と思っている」そんな人はいませんか？ 就活について言えば、動き出したときには行きたい会社はもう枠がないとか、いざ面接・・・話すことが何もない、何を聞かれても答えられない・・・という事になりかねません。進学だから関係ないよねと思ってM2で就活をはじめたら同級生は3年生の時に既に内定もらっていたり、教職だから関係ないと思っていたら採用試験がコンピテンシー面接に変わっていたり・・・こんなはずじゃなかったと思ってもう手遅れです。そうならないために今、この本「出来たことノート」を手に入れましょう。著者は永谷研一さんです。

ふりかえりの落とし穴

反省することをふりかえりと思っていませんか？ 必要なのは内省です。どう違うのでしょうか？ そもそも人は、特に日本人は欠けている部分に注目しがちです。生まれたときから完全な人なんていません。でも、うちの子はそうなってほしい。何でも出来て良い大学に行き、良い会社に就職して良い生活をしてほしい。何不自由なく過ごせるようになってほしい。そう思うから完全でない部分をなくそうとします。そのような教育が生まれてからずっと18年間続いたのが大学生です。ふりかえりをすれば出来なかったこと、失敗したことを並べ、なぜそうなったのか探り、どうすれば良いかを考えます。嫌な自分と向き合う時間です。うんざりしませんか？

一方、出来たことはスルーしがちです。でも、うまく行ったとき、なぜうまく行ったかちゃんとふりかえっておかないと再現できにくいですか？ ネガティブなことは頭に残りがちです。「こうしてはいけない」と思えば思うほど、「こうしては」の部分が記憶に残り、思い出され、やってしまうなんて事もあります。してはいけないことではなく、やるべき事を意識することが重要です。そのためにも、出来たことをきちんと分析することが重要なのです。

今日できたことを寝る前にノートに書いてみよう

出来たことをノートに書くと言っても、そう簡単ではないように思います。毎日そんなにできたことなんてない…。そんなことはありません。実は沢山あります。例えば、今日一日自分が関わった人のことを思い出してみよう。すごくうれしそうにしていたり、お礼を言われたりしたことはありませんでしたか？ それは私が何かをその人にしてあげたからではないでしょうか？ 何をしてあげたのでしょうか。良く思い出してみよう。もしかしたらあなたが笑顔であいさつしただけかも知れません。それでも何かいつもと違っていたのでしょうか。それで相手がよくこんでくれたとしたら、これは一つ出来たことに数えて良いでしょう。このようにすると、実は出来ていることが毎日あるものです。

週に一度深掘りしてみる

今週書きためた出来たことを、週に一度、よくよく見返してみよう。そしてその中から一つを選び、深掘りしてみましょう。出来たことノートには、次のようにふりかえると良いと書いています。

- 1 具体的に何があったのか？
- 2 なぜそれが出来たのか？
- 3 今素直にどう感じている？
- 4 明日からどんな工夫をしてみる？

このようにふりかえりを行うことで、内省が出来ます。なれば15分くらいで出来るようになります。一日5分の出来たことノート、週に一回15分程度のふりかえり、これなら忙しくても出来そうです。何かのついでに毎日続けましょう。

さて、ここで重要なことはこの順番でふりかえりを行うことです。そして書くことです。詳しくは出来たことノートを読んでみましょう。

そもそも本当に出来たと言えるのか？

あなたが成長するための重要な問があります。毎日出来たことノートを書き、週に一度内省をします。そして明日からの工夫を実践してみましょう。ただし、あなたが最初に出来たと思ったことは、本当に出来たと言えるのでしょうか？ そもそも何が目的でやったことなのでしょう？ その目的や目標から考えて、自分が出来たと思って書いたことは、その目的や目標に近づいたことなのでしょう？ このように再度ふりかえてみましょう。そもそも出来なかったことばかりふりかえていると、この問が出来ません。そもそも出来てないわけですから。出来たと思ったことが、本当に出来たと言えることかふりかえることで、さらに一歩前進できます。

「出来たことノート」には、出来たことの見つけ方やふりかえりの仕方が、詳しくわかりやすく書かれています。事例も有りわかりやすいです。この記事でちょっと気になる人は、是非買って読んでみて下さい。



ちゃんととっていますか？ 地域関連科目

共通教育や専門教育の科目の中には、「地域関連科目」というものがあります。

これは、高知大学の理念（「地域社会及び国際社会に貢献しうる人材育成と学問研究の充実・発展を推進する。」）の下に、地域が直面する諸課題を自ら探求し、幅広い視点で考え、その解決策を提案できる人材を育成するために地域を盛り込んだ内容を展開している科目のことです。

地域関連科目で取り上げている地域とは、高知県を指し、教育に掲げる人材育成目標を目指して、それぞれの授業において、高知県の事象を教材として具体的に取り扱った内容（必ずしも全てのコマで地域に関する内容を扱っているとは限りません。）を展開しています。

●地域関連科目かどうかは、どこでわかる？

シラバスを見ると、上方に「地域関連科目区分」という枠があります。地域関連科目であれば、そこに「地域関連科目」と書かれています。

（上記は平成27年度以降のシラバスのことです。平成26年度のシラバスでは、「地域関連科目区分」欄がありませんので、「資格等」欄に「地域関連科目」と書かれています。）

共通教育科目であれば、共通教育履修案内の授業題目表の中に、地域関連科目欄があり、そこでも確認することができます。

また、修得済みの科目の中に地域関連科目があるかは、成績確認表で確認することができます。



●必ずとらないといけないの？

教育学部、農林海洋科学部、地域協働学部、土佐さきがけプログラムでは、平成27年度以降に入学した学生から、地域関連科目を履修することが卒業の要件に入っています。卒業に必要な単位数などは、学部によって異なります。まずは、各学部の履修案内を見てください。それでも不明な点は、各学部教務担当窓口を確認してください。

●履修を忘れてはいませんか？

上記の卒業要件に入っている学部の学生で、「地域関連科目なんて意識したことがない!」という場合は、一度成績確認表で確認してみてください。要件に届いていればよし、届いていなければ、今後の履修登録のときに忘れずに履修してください。

編集後記

いよいよ大学生としての学びが始まりましたね。皆さん、ご自分の立場が、「生徒」から「学生」にクラスチェンジしたことをご存知ですか？前者は「教わる立場」、後者の皆さんは「自ら学ぶ立場」なのです。各自の自主的な知的探究心に基づき、これから学びの世界に向かって大いに羽ばたいてもらいたいと思います。共通教育はそのための滑走路です。(Y)